

ふくろだいせき 12 袋田遺跡

所在地：勝山市本町2丁目・3丁目

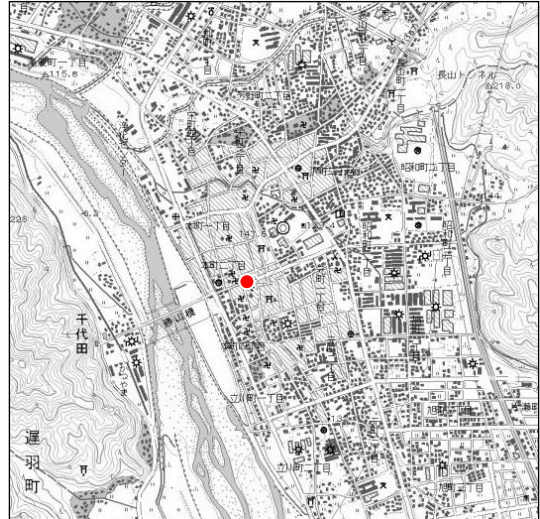
調査原因：一級河川大蓮寺川改修事業

調査期間：令和4年4月～8月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：305 m² (7区：160 m² 8区：145 m²)

時代：弥生・古墳時代・奈良・中世・近世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 袋田遺跡は九頭竜川右岸の河岸段丘上に位置し、中世の袋田村、近世の勝山城下町のほぼ全域を含むと考えられる複合遺跡です。令和元年から市道元禄線の中央部分で調査しており、最終年となる4年度は西宮寺東側の道との交差点部分から後町通りとの交差点部分までが対象です。2分割した対象地の西側を7区、東側を8区と呼称して調査し、どちらの調査区でも4面の生活面を検出しました。

主な遺構 7区では、石組井戸1基、石積遺構2基、池状遺構1基、鍛冶関連遺構、竪穴住居3棟などを検出しました。鍛冶関連遺構は、2重の粘土の壁で作った半球形の構造物で精錬に関する可能性があるものと、その傍らの鉄滓を捨てた土坑、これらの約15m東側にある鍛冶炉の底部とみられる被熱面です。昨年と合わせて室町時代の鍛冶関連遺構が3箇所確認され、『平泉寺賢聖院院領目録』にみえる鍛冶屋の存在がより明確となりました。また8世紀代のカマドを有する竪穴住居や、勝山市域で初めてみつけた7世紀前半の竪穴住居は、勝山の古代を考える上で貴重な資料と言えます。

8区では、石組井戸4基、素掘り井戸1基、池状遺構1基、鍛冶関連遺構などを検出しました。鍛冶関連遺構は炉の底部と考えられる被熱面と、その鉄滓を捨てた土坑で、時期は江戸時代と考えられます。『幕末勝山町之図』などから城下町に鍛冶屋がいたことは明らかでしたが、それが考古学の面からも裏付けられる結果となりました。

主な遺物 弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、越前焼、肥前系陶磁などの土器・陶磁器類や、打製石斧、石臼やバンドコといった石器・石製品のほか、鉄滓や砂岩製の羽口、鉄製品など鍛冶に関するものも出土しました。 (藤本聡子)



7区 精錬関連遺構(北東から)



7区 鉄滓を捨てた土坑(北東から)



7区 鍛冶炉の底部(北西から)



7区 カマドをもつ竪穴住居(北西から)



8区 炉底部と鉄滓を捨てた土坑(南東から)



8区 素掘り井戸(南東から)



8区 池状遺構(東から)



8区 石組井戸(北西から)